

中学校柔道授業に及ぼす直前のマット運動単元の効果の 検証

川戸湧也*

抄録

現行の中学校学習指導要領の実施により平成24年度より中学校体育授業において武道領域の必修化が図られた。しかしながら武道領域の柔道においては授業を実施する上で、課題が指摘されている。愛好的態度の育成が不十分であること、教師が自らの指導力を不安視していること、授業時数が不十分であること、事故の発生に対する懸念などである。そこで本研究ではそれらの課題を解決するために柔道で実施される運動と類縁性・系統性のある器械運動領域のマット運動に着目して、この二つの授業を連結させた授業を計画し実施することと、その授業による成果と影響について生徒・教師の立場から検討することとした。

本研究では授業者と研究者の協議の上マット運動3時間に柔道6時間を連結した授業計画を作成し、実施した。合わせて学習指導要領に沿った通常の授業を実施した。それぞれの授業過程について分析を行うとともに、質問紙調査ならびにインタビュー調査の結果を基に成果と課題の検討を行った。

授業過程の分析の結果、本研究で計画した授業計画に基づいて実施された授業では学習指導に充てられる時間が対照群よりも多かったが、十分に授業を実施することができた。生徒に対する授業成果について、質問紙調査の結果本研究で作成した授業を実践することによって柔道に対するイメージを向上させられる可能性が示唆された。教師に対する授業成果については、質問紙調査およびインタビュー調査の結果、本研究で計画した授業計画に基づいて実施された授業を行うことによって教師は指導の効率化や生徒の回転感覚の習得が図られたと述べており、指導経験の少ない授業者においても本研究で実施したマット運動と柔道を連結した授業計画は有効に活用できると示唆していた。

本研究では対照群と実験群を設定したが、対象とした学校が異なることから、授業者や生徒の属性が異なってしまったことが課題として挙げられる。

キーワード：武道必修化，類縁性，愛好的態度，効率化

* 筑波大学大学院 〒3305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

Verification of floor exercise unit of the effect of before on the junior high school judo lessons

Yuya KAWATO

Abstract

The purpose of this study was to make judo unit linked to the floor exercise class , to do in the junior high school physical education ,and to examine the achievements and problems of giving the student and the teacher in order to solve the various issue that have been pointed out for judo class that the problems that have been pointed out that the low-loving attitude for judo of the students, and the subject of the curriculum that insufficient class hours.

We examined the achievements and challenges on the basis of the results of the questionnaire, as well as interviews. As result, it was possible to raise the loving attitude score for judo and the satisfaction in physical education score of the students throughout this practice. Teacher has realized he efficiency of teaching throughout this practice. And he was stated that this practice can also be implemented elsewhere.

Key Words : Martial arts, Affinity, Loving attitude, Efficiency

* University of Tsukuba Tennodai1-1-1 Tsukuba Ibaraki Japan

1. はじめに

平成 24 年度からは中学校において学習指導要領が完全実施されたが、保健体育科では「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図ること、また、学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る」(文部科学省, 2008) ことを基本方針として改善を行った。特に発達段階のまとまりから、中学校の「第 1 学年及び第 2 学年」, 「第 3 学年」に分けて示されることとなった。中学校の「第 1 学年及び第 2 学年」では「多くの領域の学習を十分させた上で、その学習体験をもとに自ら探究したい運動を選択できるようにする」(文部科学省, 2008) という基本方針から、学習指導要領で示されている「A 体づくり運動」から「H 体育理論」までのすべての領域を履修させることとなった。従前では第 1 学年で「武道」あるいは「ダンス」のいずれかの選択としていたが、今回の改訂によって「F 武道」ならびに「G ダンス」の必修化が図られたのである。

この武道領域必修化の背景としては 2006 年に改正された教育基本法第 2 条において、いわゆる「伝統と文化の尊重」が盛り込まれたこと(波本・三上, 2008) が挙げられる。この武道について本村(2003) は「直接的に相手を制する技を利用して勝敗を競い合うなど、仲間とのかかわりを学ぶには他のスポーツとは違った、相手を思いやる心や律する子ことを育むよい学習の場」であると述べている。すなわち武道は、自律や協調などという心と体の調和を重視する「生きる力」に即した、今日的な教育目標を達成するために適した運動領域であると言える。

このような経緯で必修化が図られた武道であるが、その授業実践においてはさまざまな調査からその現状と課題が示唆されている。

学習目標の達成状況について、「武道等指導推進事業調査報告書」(東京女子体育大学, 2015) において愛好的態度の育成と「知識・思考・判断」に関して課題があるとした。つまり生徒においては柔道に対する愛好的態度育成する必要性が示唆された。あわせて報告書は技能の取り扱いについても課題を指摘していた。投げ技について、授業で生徒が習得できていない理由ならびに指導していない理由について、45.4%の教師が「授業時数等年間指導計画の問題」を課題として挙げていた。すなわち柔道授業においては効率的な指導は不可欠であり、その点において工夫が求められる。

このような課題が指摘されているほか、授業を担当する教師に調査を実施したところ、授業で何をどのように教えるべきなのかという疑問や不安が多数存在していることが明らかにされている(鹿屋体育大学, 2012)。

ここから危惧されることとしては、事故に対する懸念を抱えるあまり、柔道の運動特性である「崩し」や投げ技の学習を控えて礼法や固め技の学習に終始してしまうという点であろう。十分な学習成果を生徒に保証するために安全に留意しながらも柔道の運動特性を学習でき、態度、知識とともに技能も十分に学ぶことのできる柔道授業の計画とその実施が求められる。柔道指導に関する先行研究としては、例えば文部科学省(2013) では柔道指導の手引(三訂版)を作成し、その中で 10~22 時間の授業展開を例示している。さらに茨城県教育庁保健体育課(2012) や群馬県教育委員会(2012) においても授業の展開例が示されている。合わせて競技団体である全日本柔道連盟(2012) においても「柔道授業づくり教本」が発行されている。しかしながら、これらの資料の内容を見ると、経験の浅い教師や柔道を専門としない教師にとっては難しい内容も含まれており、より平易に安全かつ効率的な指導のための工夫が求められる。

そこで本研究では柔道で行われる運動に類縁性のある器械運動領域の「マット運動」に着目をし、マット運動と柔道を連結した授業を計画し実施することによる成果と影響について検討することとした。

2. 目的

本研究の目的は、柔道で行われる運動に類縁性のある器械運動領域「マット運動」授業を柔道単元に先行して実施する授業実践の成果と影響について明らかにすることとした。そこで以下の下位課題を設定した。

課題 1: 授業の計画・実施と授業過程の明確化

課題 2: 生徒に対する授業成果の検討

課題 3: 教師に対する授業成果の検討

3. 方法

1) 本研究の対象

本研究では 2 つの対象を設定した。マット運動と柔道を連結した授業を実施する実験群と通常通りに授業を実施する対照群である。実験群は埼玉県 K 市立 O 中学校第 1 学年 3 クラス 110 名(男子 49 名/女子 61 名)、授業者 1 名(教職歴: 10 年, 男性, 専門種目: バスケットボー

ル)とした。対照群は埼玉県K市立H中学校第1学年4クラス118名(男子65名/女子53名)、授業者1名(教職歴〇年,男性,専門種目:バスケットボール)とした。

2) 介入授業実践の計画

介入授業実践を計画するにあたって本研究者ならびに授業者の2名によって事前に打ち合わせが行われ、器械運動マット運動授業3時間に柔道単元6時間を連結して実施することが取り決められた。マット運動には「転がる」、「バランスをとる」などの運動があり、また転がる運動では目線が腰よりも下がるなど柔道で行われる運動と類似する点が多く、これらの運動を柔道単元に先立って生徒に学習させることが柔道における事故防止や生徒の愛好的態度の育成、ならびに技能の向上に資することができると考えた。

本研究ではマット運動授業と柔道単元を連結させるために「ハンガーを用いた受け身の学習」ならびに「修正された浮き落とし」という2つの教材を提案した。両者とも相対して行う学習で受け身と崩しが同時に学習できる。さらに低い位置かあら横転するように転がるため、マット運動と柔道を連結させるための工夫として提案した。

表1 マット運動授業と柔道単元を連結した授業計画

器械運動(マット運動)				武道(柔道)			
単元目標: 基本的な技を学習し、自分の体に気づく				単元目標: 日本武の精神的な姿勢である柔道姿勢を身に付け、日本の文化を理解すると共に、柔道の科学性について知る。			
時間	1	2	3	1	2	3	4
ねらい	マットになれる			色々な姿勢について学ぶ			柔道の様々な動きを学ぶ
本時ねらい	転がる運動を通して体を学ぶ(体入る)ようにする	色々な技に挑戦する	新しい技を学ぶと共に、合わせて今までに学習した技を復習する	学習の進め方を同時に、合わせて今までに学習した技を復習する	色々な姿勢を行いながら、基本的な技の復習を行う	柔道の復習を行うことと変更を促しながら「転がる」を学習させることも行う(転がる)を学習させる	柔道の復習を通して、受身の復習と崩しを学習する
10分	オリエンテーション			オリエンテーション	(柔道着の着方の確認) W-LIP 前転運動		W-LIP 前転運動
20分	W-LIP			柔道のVTR「学習について」を学習する	受身の復習 前転までに学習した理論の受身の復習		受身の復習 前転までに学習した理論の受身の復習
30分		前転の復習と 側転後転の学習	側転の復習と 側転後転の学習	側転の復習と 側転後転の学習	側転の復習	側転の復習	側転の復習
40分		基本的な技の学習 前転と後転	前転の復習と 側転後転の学習	側転の復習と 側転後転の学習	側転の復習	側転の復習	側転の復習
50分		側転後転の学習	側転後転の学習	側転後転の学習	側転後転の学習	側転後転の学習	側転後転の学習
		発表会	発表会	発表会	発表会	発表会	発表会
		片付け	片付け	片付け	片付け	片付け	片付け

3) 授業の分析方法

教師の教授行動や授業の展開過程について、授業の様子をデジタルビデオカメラを用いて撮影し、映像データをもとに組織的観察法である期間記録法(高橋, 2003)を用いて、分析を行った。さらに教師と生徒とのやりとりである相互作用行動についても分析を実施した。さらに映像分析ソフト STUDIO CADE を用いて授業過

程の可視化を試みた。

行動の種類	時間 54分09秒	割合	回数 31回
学習指導(I)	16分16秒	30%	13回
マネジメント(M)	08分22秒	15%	8回
認知学習(A1)	12分15秒	23%	2回
運動学習(A2)	17分16秒	32%	8回

対象	総合計 40回	個人対象 15回	グループ対象 12回	全体対象 13回
加子/リ/内容	具体的	一般的	具体的	一般的
● 肯定的FB	4	14	2	3
● 修正的FB	3	3	3	2
● 否定的FB	0	0	0	0
○ 発問	9		4	1
● 励まし	7		1	2

図1 授業展開の可視化の例

4) 生徒に対する授業成果の調査方法

生徒に対する授業成果の調査として、形成的授業評価(高橋, 2003)、動機づけ質問紙調査(長谷川・下田, 1999)柔道に対するイメージ調査を実施した。

形成的授業評価は毎授業後に実施し、本研究で実施された授業が生徒にとって受け入れられたかどうかを検討した。動機づけ質問紙調査ならびに柔道に対するイメージ調査は授業実践の前後で実施し、生徒の授業に対する動機づけの変容ならびに柔道に対するイメージの変容についてt検定(対応あり)を用いて検討した。

5) 教師の授業成果についての検討

教師に対する授業成果の調査として授業についての自由記述式の質問紙調査およびインタビュー調査を実施した

4. 結果及び考察

1) 授業実践の展開と省察

(1) 対照群の組織的観察と省察

ここでは対照群で実施した柔道単元について、どのような過程で実施されたのかについて分析を行った。

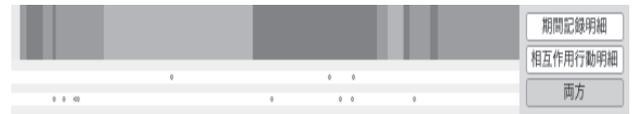


図2 対照群の柔道授業1時間目



図3 対照群の柔道授業2時間目



図4 対照群の柔道授業3時間目

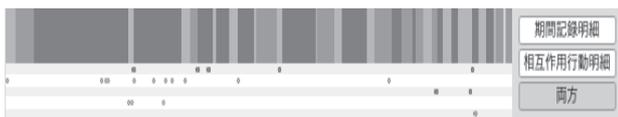


図5 対照群の柔道授業4時間目



図6 対照群の柔道授業5時間目

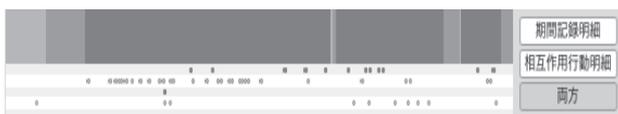


図7 対照群の柔道授業6時間目



図8 対照群の柔道授業7時間目

本実践では研究者側から授業者に対して介入を行わなかった。そのため単元計画や教材については授業者の裁量に一任した。本単元では主に固め技を中心に授業が進められた。投げ技については授業の後半に膝車と体落としの学習が行われたが、学習時間は少なかった。授業の進行に伴って運動学習時間が増加した。特に最終回では授業の74%が運動学習時間であったが、そのほとんどは技能テストの実施時間に充てられていた。

(2) 実験群の組織的観察と省察

ここでは実験群で実施したマット運動授業と柔道単元について、それぞれどのような過程で実施されたのかについて分析を行った。

① マット運動授業の組織的観察と省察

本研究で実施されたマット運動授業は以下のように展開された。

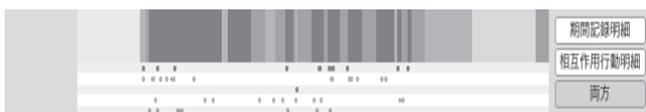


図9 マット運動授業1時間目のタイムライン

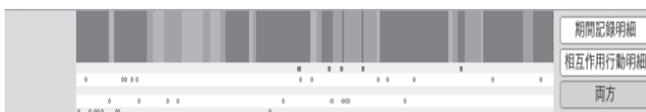


図10 マット運動授業2時間目のタイムライン

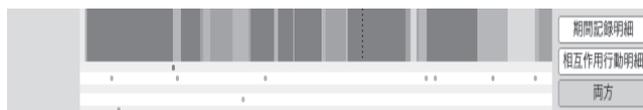


図11 マット運動授業3時間目のタイムライン

本実践におけるマット運動授業の展開や教材については研究者側から授業者に対して特に介入しなかった。その理由としては、研究者が介入した特別なマット運動授業を実施するのではなく、一般的に中学校の学習指導要領に沿った形で実施されているマット運動授業と柔道単元との連結を本研究では目指しているためである。授業の内容について見ると、本実践の運動学習場面で行われた内容は「肩倒立」、「ゆりかご」、「丸太転がり」、前転・後転、開脚前転・開脚後転、倒立前転、側方倒立回転の確認が行われた。それぞれの運動について、教師がポイントを確認し演示をしながら指導していた。一方で、授業時数が3時間と少なかったため中学校の学習指導要領に示されている「条件を変えた技」や「発展技」は行うことができなかった。また技を「組み合わせる」ことについては3時間目の発表会で行われたにとどまった。しかしながら、毎回の授業で復習を兼ねたスキルアップの学習を行っていたため、「基本的な技」を「滑らかに行う」ことは達成されたと考える。すなわち本実践では3クラスにとり、中学校の学習指導要領に示された内容に沿って同じような進捗状況でおおむね実施されたとと言える。

② 柔道単元の組織的観察と省察

本研究で実施された柔道単元は以下のように展開された。



図12 柔道単元1時間目のタイムライン

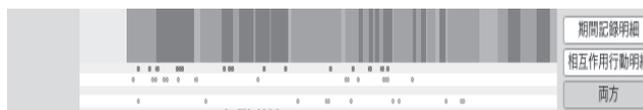


図13 柔道単元2時間目のタイムライン

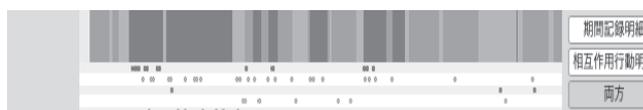


図14 柔道単元3時間目のタイムライン

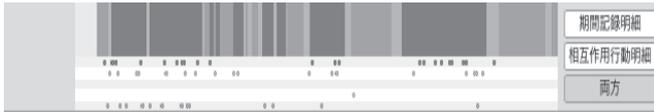


図 15 柔道単元4 時間目のタイムライン

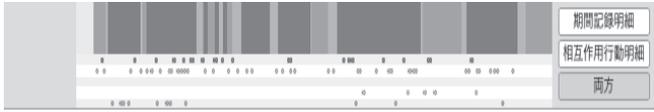


図 16 柔道単元5 時間目のタイムライン



図 17 柔道単元6 時間目のタイムライン

本実践ではマット運動授業との連結を考慮し、教材について介入を行った。柔道単元においてはマット運動で獲得した回転感覚を柔道の学習においても活用するために、授業の初めにウォーミングアップとして「丸太転がり」、前転・後転を実施した。また「ハンガーを用いた受け身の学習」では受・取の生徒ともに膝立ちの姿勢から横転させるように実施することでマット運動での動きに近づけるように工夫した。またハンガーを用いることで「崩し」を焦点化するよう工夫した。これによって取は相手を崩して投げることを、受は相手に崩されて転がることを意識づけるようにした。

2) 生徒に対する授業成果の検討

ここでは実験群・対照群それぞれの実践が生徒に与える成果を検討するために実施した質問紙調査の結果を示す。

(1) 柔道に対するイメージの変容の検討

ここでは柔道に対するイメージがどのように変容するのかを検討するためにイメージ調査を実施した。この調査では得点が低下するほどイメージがポジティブに変容したことを示している。

対照群では柔道に対するイメージは実践の前後ではほとんど変化しないことが示唆された。実践の前後において5%水準で有意な得点の低下が認められた質問項目は「楽しいー楽しくない」、「爽快な感じー気分の悪い感じ」、「好きー嫌い」の3つのみであった。

一方実験群ではすべての質問項目において実践の前後において5%水準で有意な得点の低下が認められた。したがってマット運動と柔道を連結した授業実践は柔道に対するイメージをポジティブに変容させることができる可能性が示唆された。

表 2 対照群におけるイメージの変容

	実践前		実践後		t値	有意差
	M	SD	M	SD		
楽しいー楽しくない	2.50	1.4094	1.68	1.4094	3.095	①>②*
爽快な感じー気分の悪い感じ	2.66	1.2580	2.03	1.2580	2.602	①>②*
心地よい感じー苦しい感じ	2.82	1.2704	2.34	1.2704	1.992	n.s.
素晴らしい感じーくだらない感じ	2.61	1.3262	2.21	1.3262	1.624	n.s.
好きー嫌い	2.76	1.3840	1.97	1.3840	2.818	①>②*
役に立つ感じー役に立たない感じ	2.79	1.3588	2.29	1.3588	1.544	n.s.
苦なしい感じー老けた感じ	3.05	1.2509	2.95	1.2509	.381	n.s.
生き生きした感じー生気のない感じ	2.53	1.1795	2.37	1.1795	.607	n.s.
健全な感じー不健全な感じ	2.53	1.1563	2.53	1.1563	0.000	n.s.
親しみやすい感じー親しみにくい感じ	2.63	1.2175	2.66	1.2175	-.088	n.s.
スマートな感じーかっこわるい感じ	2.92	1.2166	2.74	1.2166	.672	n.s.
意志が強い感じー意志が弱い感じ	2.50	1.3305	2.03	1.3305	1.612	n.s.
軽快な感じー重々しい感じ	2.66	1.0973	2.61	1.0973	.183	n.s.
美しいー醜い	2.66	1.3002	2.55	1.3002	.370	n.s.
愉快な感じー不愉快な感じ	2.87	1.2980	2.84	1.2980	.088	n.s.
近づきやすい感じー近づきたくない感じ	2.95	1.2723	2.84	1.2723	.352	n.s.
変化に富んだ感じー単調な感じ	2.90	1.2034	2.39	1.2034	2.004	n.s.
明るい感じーくらしい感じ	3.00	1.1150	2.68	1.1150	1.108	n.s.
慮される感じーイライラする感じ	3.29	.9273	2.82	.9273	1.667	n.s.
解放された感じー抑圧された感じ	3.03	1.1505	2.66	1.1505	1.140	n.s.
和やかな感じーとげとげした感じ	2.76	1.0510	2.61	1.0510	.595	n.s.
安全な感じー危険な感じ	3.21	1.2116	3.03	1.2116	.642	n.s.

*p<.005

表 3 実験群におけるイメージの変容

	実践前		実践後		t値	有意差
	M	SD	M	SD		
楽しいー楽しくない	2.74	.922	1.61	.808	9.177	①>②*
爽快な感じー気分の悪い感じ	2.53	1.023	1.95	.890	4.148	①>②*
心地よい感じー苦しい感じ	2.88	.906	2.23	1.001	4.488	①>②*
素晴らしい感じーくだらない感じ	2.64	.885	1.99	.899	5.663	①>②*
好きー嫌い	3.09	1.075	1.96	.985	7.861	①>②*
役に立つ感じー役に立たない感じ	2.78	1.253	2.11	1.028	3.948	①>②*
苦なしい感じー老けた感じ	2.70	1.056	2.22	1.114	3.231	①>②*
生き生きした感じー生気のない感じ	2.26	.892	1.85	.902	3.216	①>②*
健全な感じー不健全な感じ	2.49	1.037	2.15	1.016	2.300	①>②*
親しみやすい感じー親しみにくい感じ	3.07	.984	2.65	1.078	2.660	①>②*
スマートな感じーかっこわるい感じ	2.78	.983	2.50	.798	2.346	①>②*
意志が強い感じー意志が弱い感じ	2.27	.880	1.85	.932	3.110	①>②*
軽快な感じー重々しい感じ	2.92	.872	2.57	1.086	2.275	①>②*
美しいー醜い	2.78	.983	2.39	1.031	2.776	①>②*
愉快な感じー不愉快な感じ	2.82	.817	2.41	.890	3.359	①>②*
近づきやすい感じー近づきたくない感じ	3.14	.926	2.76	1.057	2.567	①>②*
変化に富んだ感じー単調な感じ	2.91	.830	2.42	.907	3.759	①>②*
明るい感じーくらしい感じ	2.62	.989	2.16	.966	3.305	①>②*
慮される感じーイライラする感じ	3.04	.784	2.80	.811	2.143	①>②*
解放された感じー抑圧された感じ	2.70	1.030	2.31	1.019	2.590	①>②*
和やかな感じーとげとげした感じ	3.12	.793	2.78	.969	2.554	①>②*
安全な感じー危険な感じ	3.82	1.064	3.28	1.200	3.506	①>②*

*p<.005

(2) 動機づけ質問紙調査の結果の検討

ここでは柔道授業に対する動機づけがどのように変化したのかを検討するために、動機づけ質問紙調査を実施した。

対照群では体育授業に対する愛好的態度を示す

「運動が好き」、柔道に対する愛好的態度を示す「柔道が得意」の2変数を除いたその他の変数で実践の前後において5%水準で有意な得点の向上が認められた。

実験群では体育授業に対する愛好的態度を示す2変数「体育が好き」・「運動が好き」、「仲間目標志向」ならびに「回避目標志向」を除いたその他の変数で実践の前後において5%水準で有意な得点の向上が認められた。つまり、対照群・実験群どちらにおいても生徒の動機づけをおおむね高められることが明らかにされた。マット運動と柔道を連結した実践を行っても通常通り授業を行う場合と同様の結果が得られることが示唆された。

表4 対照群における動機づけの変容

	実践前		実践後		t値	有意差
	M	SD	M	SD		
体育が好き	2.47	1.224	3.11	0.953	-2.775	①<②*
運動が好き	2.66	0.909	2.53	1.084	-.597	n.s.
柔道が好き	2.39	0.916	3.16	0.855	-3.863	①<②*
柔道が得意	2.21	1.119	2.45	0.921	-1.120	n.s.
体育での満足感	2.64	0.718	3.01	0.577	-2.639	①<②*
マスター一雰囲気知覚	2.49	0.882	3.18	0.436	-4.709	①<②*
パフォーマンス雰囲気知覚	2.37	0.766	2.85	0.471	-3.385	①<②*
課題目標志向	2.41	1.126	3.31	0.631	-4.486	①<②*
自我目標志向	2.50	0.905	3.22	0.570	-4.300	①<②*
仲間目標志向	2.50	1.273	3.35	0.666	-3.910	①<②*
回避目標志向	2.54	1.030	3.00	0.798	-2.269	①<②*

*p<0.05

表5 実験群における動機づけの変容

	実践前		実践後		t値	有意差
	M	SD	M	SD		
体育が好き	3.05	.849	3.11	.862	-.851	n.s.
運動が好き	2.48	.949	2.50	.949	-.217	n.s.
柔道が好き	1.89	.636	3.15	.808	-12.063	①<②*
柔道が得意	1.33	.506	2.24	.745	-9.248	①<②*
体育での満足感	2.34	.322	2.72	.290	-8.037	①<②*
マスター一雰囲気知覚	2.95	.349	3.09	.460	-3.048	①<②*
パフォーマンス雰囲気知覚	3.01	.382	3.14	.501	-2.402	①<②*
課題目標志向	3.27	.429	3.42	.441	-2.803	①<②*
自我目標志向	3.32	.453	3.48	.486	-2.977	①<②*
仲間目標志向	3.37	.453	3.40	.615	-.452	n.s.
回避目標志向	3.30	.515	3.33	.694	-.370	n.s.

*p<0.05

3) 教師に対する授業成果の検討

本研究で行った実践が教師にとってどのように受け入れられたのかを検討するために質問紙およびインタビュー調査を実施した。

(1) 対照群の授業者

対照群の授業者に対しては授業についての自由記述式の質問紙調査を実施した。

対照群の授業者は本研究で実施した授業について、「生徒にとって受け入れられていた」と述べていた。その理由としては「普段着用しない柔道着を着用したり、礼法を学んだり、技をかけ合ったりすることで、柔道のおもしろさを味わうことができたと思う。」としていた。

授業を実施する上で授業者が「怖い」、「危険だ」と感じた場面について、2つの場面を挙げていた。

「固め技の試合の時」と「受け身の練習の時」である。「固め技の試合の時」では「間隔が狭く、生徒同士がぶつかってけがをしないか心配であった。」と回答するとともに「倒されたときに手のひらから畳につくような生徒が見られた。」とも回答しており、生徒が固め技の学習に従事する際に傷害が発生してしまうことを危惧していたということがわかる。合わせて「受け身の練習の時」についても「後頭部が畳に接触しそうだった。」と述べており、「もう少しあごを引いて後頭部を保護するという意識を持たせたい。」と続けていることから傷害の発生を危惧していることが示唆された。

一方で授業者が「面白い」、「興味深い」と感じた場面について「固め技の練習や試合中」を挙げていた。その理由として授業者は「徐々に取・受ともに動きが激しくなっていく、『ガチンコ勝負』になっ

ていった。」、「日常の学校生活では比較的大人しい子が、目の色を変えて攻防していた。」というように述べており、生徒同士が全力を出し合った真剣勝負の場面が増えたことを「面白い」、「興味深い」と感じていたと示唆された。また「技をかけるときのつかみ方、逃げる時の方向など、教えていないことでも自分なりに考えて動いていた。」と述べており、自発的な学習が増加した様子を「面白い」、「興味深い」と述べていた。

本実践を行う上で授業者が安全に注意した場面について、「固め技の試合の時」と「技をかける練習をする時」の2つの場面を挙げていた。「固め技の試合の時」では「ぶつからないように、間隔を十分に開けるよう配慮した。」と回答し、「技をかける練習をする時」では「けがの防止のため、体格差が同じくらいの生徒とペアを組ませてやらせた。」と述べていた。すなわち、「怖い」、「危険だ」と感じた場面で述べていた傷害発生に対する危惧から傷害が発生しないための工夫を積極的に行うよう注意していたことがうかがえる。

授業を実施する上で授業者がやりやすい場面について、「人数があまり多くないため、一人一人に声をかけやすかった。」、「授業が進むにつれて、道着の着用には慣れたため、着るための時間を短縮できた。」、「受け身が上手い生徒がいて、その生徒を見本に模範演技ができた。」と述べていた。一方で授業者がやりにくかった場面については「身体接触の観点から、女子生徒に対する指導に抵抗があった。」、「技をかけるときに、受け身は「痛い」「苦しい」というイメージを払拭すること。」、「足さばきを教えると意識が足ばかりに集中し、つり手と引き手がおろそかになる。その逆もあった」と述べていた。これらを見ると、教師は教授方法に関する点についてやりやすさを述べていた。これは普段の授業の約束事や雰囲気を柔道の授業においても活用できていたと推測される。一方でやりにくかったと回答した内容では柔道そのもの、あるいは柔道の運動特性に関する内容を述べていた。これについては授業者がバスケットボールを専門としていること、柔道の指導経験が少ないことなどが原因であると推測される。

(2) 実験群の授業者

実験群の授業者に対してはインタビュー調査を実施した。

実験群の授業者においてはマット運動授業と柔道単元を連結して実施した本実践について「マット運動から移行した方については転がるってということに関して言えばこちらとしても十分に意識して

指導できた」と述べており、また生徒の様子について「ある程度慣れがあるので、素直にというか、すんなりというか『あ、こういう風にやれば痛くないんだな』『全然痛くないな』と感じてくれていた」と述べている。授業者においては転がることについて強調して指導することができ、その指導を受けた生徒についても転がる運動についての先行経験が活用された可能性を示唆していた。授業者は先行経験の活用によって授業の進行がスムーズであったという印象を抱いており、これは柔道授業の効率化について示唆していた自由記述の内容を支持するものであった。

マット運動授業から柔道授業への連結において、授業者が一番の成果として捉えていることは回転感覚の習得であった。「やっぱり転がる感覚というところでは大きいですね」、「面でドンって落ちるのか、ゴロンって転がるのかっていう部分で、回るっていう感覚がより強まったのかなって思います」と述べており、回転感覚の習得を本実践最大の成果であると認識していた。

一方で課題としては学習時間の問題を指摘していた。本研究において、実践1は体育館で、実践2は武道場で実施したが、「準備・片付けの部分で時間10分が取れるかどうかというところで違いはありましたね。毎回の10分だとトータルでは1時間違うわけじゃないですか。そうすると全然違いますよね。」と述べており、体育館で実施する際、学習時間を十分に確保できないということを課題としてあげていた。

マット運動授業と柔道単元を連結した本実践が他所でも実施できるか、その可能性について質問を実施した。連結することについて、「僕個人としてはそこまで難しさといった意味では感じなかったです。他の行事だとか、何か他のものとの関係でもしかしたら難しくなることがあるかもしれないですね。あとは施設の問題とかもそうですが、うちみたいに柔道場を授業専用で使えない所ではやるのが難しいのかなとは思いますが。今回は時間をしっかりとってできたので良かったのですが、そうでない場合は苦しいのかなって思います。やはりそれは学校の事情ですので、子どものことだけを考えて、そこまで難しい点はないんじゃないかなと思います。」と述べており、年間指導計画であらかじめ計画を立てておくことで実現可能であるとの認識を示していることが示された。

また本実践ではマット運動授業、柔道単元ともに3人組のグループで学習を進めたが、「柔道を3人組でやらせていて必然的にマットも3人組でやらせていたんですけど、そうすることで技を見合うとい

う部分でも共通している部分があるのかなって、あとは安全に気をつけなければいけないと、まあどんな種目でもそうなんですけど、そういうところでも似ている部分があったのかなって思いますね。『見る』っていう部分では共通点があるので、マット運動をやってから柔道だと『見る目』というか、技を見合うという点で似ているのでより成長できるのかなって思いますね。」と指摘しており、単純にマット運動と柔道の運動に類縁性・系統性を意識づけさせるだけでなく、技を見合うなど学習の方法においても共通する部分があり、これについても生徒に意識づけをさせることで、学習を効率的に実施できる可能性があるとして示唆した。

5. まとめ

本研究では、生徒の愛好的態度の欠如、安全の確保、教師の指導力に対する不安といった柔道授業が抱える諸問題の解決するために、運動の類縁性・系統性が共通している器械運動領域「マット運動」授業を柔道単元に先行して実施することの成果と影響について明らかにすることを目的とし、以下の課題を設定した。

課題1：授業の計画・実施と授業過程の明確化

課題2：生徒に対する授業成果の検討

課題3：教師に対する授業成果の検討

課題1に関して、マット運動と柔道とを連結した授業計画を実験群の授業者と本研究者の2名で協議し作成した。作成された授業計画に基づいて授業を実施したところ、対照群で実施された授業と比較すると学習指導に要する時間がやや多かったが、十分に授業を実施することができた。

課題2に関して、柔道に対するイメージ調査の得点の変容を見ると、実験群ではすべての項目において実践の前後で5%水準で有意にイメージが向上していることが認められた。また動機づけ質問紙調査の結果について、ほとんど差は認められなかった。以上から、マット運動と柔道を連結して実施することで柔道に対するイメージを肯定的に変容することができる可能性が示唆された。

課題3に関して、対照群の授業者・実験群の授業者ともに安全について柔道授業を実施する際には留意していることが示唆された。対照群の授業者においては授業を行う際に、柔道そのもの、あるいは柔道の運動特性に関する内容を指導することに困難さを示していた。対して実験群で教師はマット運動と柔道を連結することによって指導の効率化や生徒の回転感覚の習得が図られたと述べており、指導経験の少ない授業者においても本研究で実施したマット運動と柔道を連結した授業計画は有効に

活用できると示唆していた。

以上のことから、本研究で提案したマット運動と連結した柔道授業の実践によって、生徒にとっては柔道に対するイメージを高められ、教師にとっては指導の効率化が図られる可能性が示唆された。

最後に、本研究で対照群と実験群を設定したが、対象とした学校が異なることから、授業者や生徒の属性が異なってしまったことが課題としてあげられる。そこで本研究において対照群として研究協力をいただいた学校で来年度にマット運動授業と柔道授業を連結した授業を計画しており、本研究での課題を踏まえた研究を継続していくこととした。また本研究では技能習得について検討を行うことができず、心理面のみを扱った検討にとどまった。今後は技能習得を含めてマット運動授業を柔道授業に先行して行うことの影響を検討していきたい。

主要参考文献

1. 濱田初幸・前阪茂樹・川西正志・安道太軌・北村尚浩 (2011), 体育専攻学生が期待する中学校における武道必修化による教育効果: 武道を専門とする学生に着目して, 鹿屋体育大学学術研究紀要第43集
2. 長谷川悦示・下田和史・滝川孝八 (1998) 小学生体育授業の評価構造と児童の動機づけ (1): 教師の言葉かけに対する児童の反応と授業の雰囲気知覚及び目標志向性の関係, 日本スポーツ教育学会第18回大会, 静岡大学
3. 長谷川悦示・滝川孝八・鈴木武文・下田和史 (1999) 小学生の体育授業における目標志向性, 群馬大学教育学部紀要, 芸術・技術・体育・生活科編, 34
4. 茨城県教育委員会 (2012) 学校体育指導資料第41集「体育授業のモデル集その6」中学校武道「柔道」,
<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/gakkou/karada/taiiku/sidou.html> (2015/06/20 閲覧)
5. 北村尚浩・川西正志・濱田初幸・前阪茂樹 (2010) 中学校における武道必修化に関するアンケート調査報告書
6. 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領, 東山書房
7. 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房
8. 文部科学省 (2012) 柔道の授業の安全な実施に向けて
9. 文部科学省 (2013) 柔道指導の手引き (三訂版), 東洋館出版社
10. 文部科学省 (2015) 器械運動指導の手引-DVD付き-, 東洋館出版社
11. 本村清人 (2003) 新しい柔道授業づくり, 大修館書店
12. 中村民雄 (2007) 今, なぜ武道か-文化と伝統を問う, 日本武道館
13. 波本勝年・三上昭彦 (2008) 「改正」教育基本法を考える-逐条解説 [改訂版], 北樹出版
14. 高橋健夫編著 (2003) 体育授業を観察評価する授業改善のためのオーセンティック・アセスメント, 明和出版, 東京
15. 高橋健夫・藤井喜一・松本格之祐・大貫耕一 (2008) 新学習指導要領準拠 新しいマット運動の授業づくり, 体育科教育 [別冊], 大修館書店, 第56巻第12号
16. 東京女子体育大学 (2015) 武道等指導推進事業(武道等の指導成果の検証) 調査報告書
17. 内田良 (2010) 柔道事故-武道の必修化は何をもたらすのか- (学校安全の死角 (4)), 愛知教育大学研究報告, 59, 131-141
18. 内田良 (2011) 柔道事故と頭部外傷 -学校管理下の死亡事例110件からフィードバック-, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, vol. 1, 95-103
19. 内田良 (2013) 柔道事故, 河出書房新社
20. 内田樹 (2010) 武道的思考, 筑摩書房
21. 藪根敏和・大宅和幸・有山篤利・藤野貴之 (2011) 柔道のよい受身動作の解明と, 動作の学習方法と評価法に関する検討, 京都教育大学紀要, No. 119, 71-85
22. 藪根敏和・藤野貴之・有山篤利 (2008) 「授業プログラムの作成」, 文部科学省委嘱事業平成19年度武道の体育授業・運動部活動の相互連携に関する研究報告書, 京都府立桃山高等学校
23. 山川岩之助・工藤信雄 (1975) 柔道指導ハンドブック, 大修館書店, p123
24. 47NEWS 公立中の64%が柔道選択 武道必修化で文科省調査,
<http://www.47news.jp/CN/201203/CN2012031501002098.html> (2014/11/28 閲覧)

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

